文學士 小林一郎謹述

海潮音

253
1058
特
18

015808-000-2

特64-185

海潮音

小林 一郎/著

M42. 2

ABC-1558

特64
185

嗚呼今の世に師なし
我等は誰に從ひて、學を成し行を勵まん。

明治
4 3 2 34
内交

嗚呼今の世に師なし
我等は誰によりて、我等の身を安んずべき處を定めん。
嗚呼今の世に師なし
我等は誰に從ひて、身の過を正さん。
嗚呼今の世に師なし
我等は誰の懷を尋ねてか、此身を投ぜん。
嗚呼今の世に師なし
されど我史を究めて、六百年前に至り、一人の師を得たり。

海潮音

一

小林一郎謹述

言はんか、言はざらんか。言はんは分に過ぎたり、言はざらんは自ら欺くに似たり。知ること淺く究むること足らずして、斯る偉人の蹟を語らんとする、分に過ぎたる者にはあらずや。されど渴仰の念斯くまで强うして、而も語るべき機を空うし、尙ほ默して語らざるは、自ら欺くに似たらずや。言ふも咎あり、言はざるも咎あり。さらば寧ろ言ひて其の咎を負はん。

濁れる水に影をうつすも、澄める月の濁れるを見ず。汚れし土の上に積めども、清き雪はいつも清し。よし我が窺ふ所の極めて淺く、我が見る所の極めて卑からんとも、偉人か今に遺したまへる教訓は、いかで我が拙き語を通して聽く人の心を動さゞらんや。我たとへ分を忘れ教を辱むるの咎を身に負ふとも、之によりて偉人の蹟の百千萬分が一なりとも、これを世に弘め人に傳ふるを得ば、また何の悔かあらん。されど、

心あてに見し白雲はふもとにて
おもはぬ方にはるゝ富士のね　（春海）

何ぞ我が卑きを以てかの高きを計り、我が淺きを以てかの深きを

探り得んや。我はたゞ其の麓にたなびける白雲を指して、富士は、彼處にありと語らんのみ。我が指せるを便りとして、なほ濶く自らの眼を開かば、人々自ら芙蓉の影を仰ぐを得ん。

迦葉尊者が麥飯を供養して、その功德により忉利天に千反生れ、釋尊に逢ひまゐらせしに僞あらずは、いかに力の微なりとも心の拙くとも、正しき道に味方し、正しき道を弘めし人を讃ずるに、躊躇し狐疑するを要せんや。我は自ら信ず、日蓮聖人生きて今の世に在さは、汝が其の功德によりて、汝が不遜の咎は赦されぬと示し給はん。

在世の月は今も月、在世の花は今も花、むかしの功德は今の

功德なり。

我は先づ幸多き身を祝して、我が心に映れる斯の偉人の蹟を語らん。

さはれ我が感は多くして、我が言には限りあり、我は先づ何をか語らん。釋尊を主なり師なり親なりと仰ぎ給へると同しく、我等は聖人を主とも師とも親とも仰がんこと固よりなれど、我はこゝに『師としての日蓮聖人』につきて語らんとす。深き仔細ありて然るにはあらず。たゞ我が感の最も切なるものを、人々の前に披瀝せんとするのみ。

つく〴〵となれて向へば我身さへ

（南條殿御返事）

月の中なるここちこそすれ

（定信）

塵世の塵事に倦みて、靜夜獨り月に向ふとき、その影は我が心に泌み、其の光は我が骨に透る。此の感を懷きてなほ久しく月に向ふとき、我また月中の人たるの思ひなき能はじ。嗚呼師道の頽敗も今に至りて極れり。教ふる者は利と名との爲にし、學ぶものも亦利と名との爲にし、互に相欺きて更に怪む所なし。道は輕薄なる師の手に弄ばれ、教は輕薄なる弟子の足に踏まれ、貴き言は賤しき貨によりて買はれ、汚れし心は清き名によりて飾らる。斯くて教ふる者は學ぶ者を愛せず、たゞ之によりて自ら肥さんとし、學ぶ者は教ふる者を敬せず、たゞ之によりて自ら利せんとす。

今の世に師なく、今の世に弟子なし、一は温顔によりて賣り一は巧辯によりて買ふのみ。斯る世に生れて六百年前の偉人を憶ひ、其の敎を受けし諸弟子の如何に幸多かりしかを憶へば、宛ら我自らその世に在りて、自ら其の坐に侍し自ら其庭を掃へるが如き感なくばあらず。汚れし肉と血とを盛りし我が身にはあれど、今暫く『月の中なる人』となりて、羨しくも尊き六百年前の師弟の樣を語らんとす。

二

師も師ならず弟子も弟子ならずして、いかで能く道を傳へ敎を明にせん。『身延山御書』に引きたまへる歌を見よ、

法華經を我が得しことは薪とり
　　菜つみ水くみつかへてぞ得し

心に解怠ありて、何ぞ能く自ら修め又能く人を導かんや。敎ふる者と習ふ者と共に正しからずは、哀むべし人は皆惑に惑を重ね、世はたゞ下りに下り行かんのみ。

大地の上に針を立てゝ大梵天宮より糸を下して、あやまたず糸の針の穴に入ることは有りとも、我等が人間に生るゝ事は難く、又億々萬刧不可思議刧をば過ぐるとも、如來の聖敎に値ひ奉る事難し。而るに受け難き人間に生をうけ、値ひ難き聖敎に値ひ奉る、たとひ聖敎に値ふと云へども、惡智識に値ふならば、

三惡道に墮ちん事疑あるべからず。師墮つれば弟子墮ち、弟子墮つれば檀那墮つと云ふ文有るが故に云々　（身延山御書）

師道の立たざる間、いかに令を嚴にし禁を密にして世道人心を匡さんと試むるとも、たゞ礎無きに梁を架し風に向ひて火を吹くに似たらんのみ。獨り宗教といはず、道德といはず、今の世に一事一藝を敎ふる者若くは習ふものを見よ。實を去りて華に就き、力を惜み苦を避けて、たゝ速に小成に就かんことをのみ望むにあらずや。されば藝の形を傳へて藝の神を傳へず、事の貌を學びて事の心を學ばず、輕浮俗を成して止る所を知らず。斯くて『今の世に名人なし』の歎起る、名人無きは敎ふると學ぶと共に過れるが

爲のみ。

俳諧をなぐさみにする上手より
たのしむ下手ぞ貴かりける（芭蕉）

利巧の人は多し、敏捷の人は多し、いはゆる『慰みにする上手』は多し。されど敎へて樂み學びて樂むもの少きが故に、一藝の小と雖も能く傳はることなし。此の如くにして國家百年の大計をいかにすべき。

彼の風濤に堪ふる喬松はその根の地に入ること深きが爲ならずや彼の雲際に聳ゆる高閣は、その礎を置くこと固きが爲ならずや。此の東海の一孤島を守りて、彼の列强と相並びて國を立て相對し

て勢を張り、永く威權と光榮とを失はざらんとする日本國民は、固より其の心を用ゆること深くして遠く、その自ら許すこと高くして固からざるべからず。たゞ今日を知りて明日を知らず、たゞ眼前を見て背後を顧みざる、今の世の習慣にして永く改まる所無くんば、抑國家百年の大計をいかにすべき。斯る流弊の由て生ずる所を考ふるに、師道の頽敗に歸せずんばあらず。教ふるものと學ぶものと共に淺くして輕し、何ぞまた多きを望むに堪へんや。されど徒に歎ずるは愚なり、我等は今に於て狂瀾を未だ倒れざるに廻し、大厦を未だ傾かざるに支ふるの策を講ぜざるべからず。斯る希望を懷きて六百年の以前を回想するに、彼の偉人が遺したま

へる師道の典型は、今も炳乎として我等が胸を照せるに似たり。我何ぞ仰いで之を慕ひ、之を讃し、之を稱し、之を歌ひ、之を語りて、一は以て自ら勵め、一は以て世を警むるの便りとせずして已まんや。

蚊蚋の大樹を憾す、笑ふべしたゞ自ら勞するのみ。六百年のむかしより、六百年後の今に至るまで、我が聖人を敵とし憎み、賊とし罵れるもの數ふるに堪ふべからず、而も彼等畢に何事をか能くせんや。憎むものはたゞ其の身の拙きを示せるのみ、罵るものはたゞ其の心の暗きを示せるのみ。我が聖人の高風は天と共に嘖く地と共に厚く、時を經ること愈久しうして、愈その光を增せるを覺

ゆるなり。

もろこしの人に見せばやみよしのゝ

よしのゝ山の山さくら花（眞淵）

日出づる國に斯る偉人を出せるを、永く彼の月入る國の人々に誇らんは、まことに我等が面目にあらずや。

三

嗚呼今の世に師なし、我等は誰に從ひて惑を啓かん。徒に舌を爛らして法を說くも、信ぜずして言ひ、知らずして敎ふる、その言に何の力かある、その敎に何の命（いのち）かある。仰ぎ見る六百年前の日蓮聖人が、自ら信じたまへることの如何に固うして深かりしよ。

何に況や日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ、旃陀羅が家より出たり。心こそ少し法華經を信じたる樣なれども、身は人身に似て畜身なり。魚鳥を混丸して赤白二滯とせり、其中に識神を宿す。濁水に月うつれるが如し、糞囊に金をつゝめるなるべし。心は法華經を信ずる故に梵天帝釋をも猶恐しとは思はず。身は畜生の身なり、色心不相應の故に、愚者のあなづる道理なり。

（佐渡御書）

其れたゞ此の如し。釋尊は佛なり、佛は妄語せず。妄語せざる釋尊が法華第一と敎へたまひし上は、法華第一たるに極れり。法華第一たる上は、法華を信ずる我は何者をも恐るべからず、憚るべ

からず。佛を信ずる者は法華を信せよ、法華を信ずるものは我を信せよ。愚者は人として我を見る、我を人として見れば我を侮るも亦道理なり。我は人としての我を信せよといはず、我が信ずる所の法華は佛の第一と定め給ひしものなるが故に、汝等も亦之を信せよと。たゞ此の如くにして、聖人の信ずる所は牢として動すべからず。之を以て始まり、之を以て終り、之を以て自ら奉じ、之を以て弟子を導きたまへり。その敎に力あり命あるは之が爲なり。斯る師を師とし仕へし諸弟子のいかに幸多かりしぞ。

鉛を鎔(とか)すに鐵を用ゆ、鉛は火に鎔けて鐵は鎔けざればなり。鐵若し鉛と共に鎔けば、何ぞ能く鎔けたる鉛を盛らん。玻璃を切るに

金剛石を用ゆ、玻璃は碎けて金剛石は碎けざればなり。若し玻璃と共に碎けば、いかで能く玻璃を斷たん。信せずして人に說くは惑を以て惑に對するなり、何ぞよく人の惑を解かん。たゞ信じて疑はず、故に敎ふる所能く一貫し、學ぶもの能く向ふ所を知るなり。

いかにもふびんには思ひ參らせ候へども、骨に肉をばかへぬ事にて候へば、法華經に相違せさせ給ひ候はん事を、叶ふまじき由いつ迄も申し候べく候。（新尼御前御返事）

法華經に違へることは僞なり惑なり、故に斷じて許すべからず、法華經に合せるは眞なり實なり、故に能く天地に彌淪す。

月は西より東に向へり、月氏の佛法東へ流るべき相なり。日は東より西へ入る、日本の佛法月氏へかへるべき瑞相なり、月は光りあきらかならず、在世は但八年なり。日は光明月に勝れり、五百歳の長き闇を照すべき瑞相なり。佛は法華經謗法の者を治し給はず、在世には無きゆへに、末法には一乘の强敵充滿すべし。不輕菩薩の利益此なり。各々我弟子等はげませ給へ、はげませ給へ。（諫曉八幡抄）

法華を信ぜる者は最大最勝の力を具するが故に、向ふとして克たざる無く、往くとして靡かざる無し。斯く信じて後弟子を勵ます、誰か勵まざらん、誰か奮はざらん。

世の教育を論ずる者、順序を究め系統を究め、形式を究め方法を究めて、獨り以爲らく斯くて能く人を教ふべしと。嗚呼抑々末なるかな。順序を立つるは人をして悟り易からしめんが爲なり、系統を整ふるは人をして解し易からしめんが爲なり。形式を完うし方法を精うするは、人をして力を用ゐること少くして而も速に達し、直に熟するを得せしめんが爲なり。安んぞ知らんや、自ら篤く信ずること無くして教ふるも、人の胸臆に徹すること深からざるが故に、學ぶこと久しうして惑のたゞ愈繁きを覺ゆるのみならんとは。唯だ夫れ

日月にあらずとも、地神も海神も聞かれよ、日本の守護神も聞

かるべし。あへて日蓮が曲意は無きなり。(妙一女御返事)

此の自信ありてこそ、諸弟子をして白刃をも踏むべし、水火をも冒すべしの覺悟を固めしむるを得たるなれ。

箱根路を我が越え來れば伊豆の海や
おきの小島に波の寄る見ゆ　(實朝)

馬をこの最高峰に立てゝ、沖の小島に波の寄するを瞰下せる、かの勇將の概なくば、何ぞよく道を傳へ能く人を敎へんや。

四

嗚呼今の世に師なし、我等は誰に從ひて道に進まん。世の道を講じ敎を說くもの、其識未だ足らざるに自ら足れりとし、其の學未

だ完からざるに自ら完しとす。彼自ら限りて進むを知らず、いかで能く人を導き世を進めん。仰ぎ見る六百年前の日蓮聖上人が究めて怠らず、求めて休まざるの意氣、いかに强盛に在しゝよ。

二十二の弱齡にて書き給へる『戒法門』には、

夫れ人は天地の精、五行の端なり。故に悟あて直きを人と云ふ。心に因果の道理を辨へて人間には生れける由を知るべし。

と說かれ、三十四の壯齡にて書きたまへる『一生成佛鈔』には

迷ふ時は衆生と名け、悟る時をば佛と名けたり。譬ば闇鏡も磨きぬれば玉と見ゆるが如し。只今も一念無明の迷心は磨かざる鏡なり。是を磨かば必法性眞如の明鏡と成べし。深く信心を發

して、日夜朝暮に又懈らず磨くべし。

と說かれたり。漫然として知るにあらず偶然にして悟れるにあらず、深く思ひ篤く學び、日夜朝暮に懈らずして初めて能く悟る。固より以て容易の業にはあらず。されば

嗚呼受け難き人界の生をうけ、値ひ難き如來の聖敎に値ひ奉れり。一眼の龜の浮木の穴にあへるが如し。今度若し生死のきづなを切らず、三界の籠樊を出でざらん事、かなしかるべし、かなしかるべし。(聖愚問答鈔)

と自ら勵み又人を勵まし給へり。『日本國に此を知れる者は但日蓮一人なり』とは決して驕慢の言にあらず、聖人か自らその『佐渡

御書』の中に、

強敵を伏して始めて力士をしる。惡王の正法を破るに、邪法の僧等が方人をなして智者を失はん時は、獅子王の如くなる心をもてる者必ず佛になるべし。例せば日蓮が如し。是れおごれるにはあらず、正法を惜む心の强盛なるべし。おごる者は必ず强敵に値ひておそるゝ心出來するなり。例せば修羅のおごり、帝釋にせめられて無熱池の蓮の中に小身と成て隱れしが如し。

と說かれたるによりて知るべし。驕るは自ら小にするなり、人に驕りて自ら喜ぶは、人の褒貶によりて心を動すものゝ事、達人は固より與せず。洪鐘は荊棘の爲に響を發せず、人より高きの人、

何ぞ人より高しとして自ら驕らんや、たゞ自ら信ずる所を信じ、守る所を守るのみ。既に人より高し、その自ら期する所また人より高からざるを得ず。既に自ら期する所あり、茲に於てか自ら勵み自ら鞭ちて、敢て自ら足れりとせず。

あくがるゝ雁の常世の秋やいかに
みやこの月もあはれなる夜に　（宣長）

都の月を翫びては、やがて常世の秋を思ふ。惑へる者には父たり師たれど、眞理の前には赤子なり、佛の前には弟子なり、たゞ之を仰ぎ之を慕ふ。

日本國の位を讓らむ、法華經をすてゝ觀經等について後生を期

せよ。父母の頭を刎ねん、念佛申さずばなんどの種々の大難出來すとも、智者に我義やぶられずは用ゐじとなり云々（開目鈔）

見よ、勢利も屈すること能はず、險難も奪ふこと能はざる、その意氣を以てして、智者を尊み恐るゝこと此の如くに其れ至れるを。

されば御齡五十四にして身延山に入り給ひて後も、

つくゞくと浮身の有樣を案ずるに、佛の法を求め給ひしに異らず。昔釋尊樂法梵志としては、皮をはぎて紙とし、髓の水を取りて硯の水とし、肉を割きて墨とし、骨を摧きて筆として、下方の迦葉佛に値ひ奉りて云々

と古を懷ひて自ら勗め更に懈りたまふこと無かりき。斯くして、

さては去ぬる文永十一年六月十七日、この山に入り候て、今年十二月八日にいたるまで、此の山出づる事一歩も候はず。たゞし八年が間、病と申し、としと申し、年々に身よわく心をぼれ候つるほどに云々

（上野殿母尼御前御返事）

と御消息ありし年まで、勤行は更に怠る所なく、

日蓮はわるき者にて候へども、法華經はいかで、おろかにおはすべき。ふくろは臭けれどもつゝめる金はきよし。池はきたなけれども蓮清淨なり。日蓮は日本第一のえせもの也、法華經は一切經にすぐれ給へる經なり。心あらん人金をとらんと思さば、ふくろをすつる事なかれ。蓮を愛せば池をにくむ事なかれ。

と、飽くまで自ら低うして、飽くまで法を尊び崇め、以て人を率ゐ導き給ひき。あゝ斯る師をもてる諸弟子の各その器を成せるもまことに謂あるかな。

（西山殿御返事）

五

嗚呼今の世に師なし、我等は誰を仰ぎて我等の就く所を定めん。右せよといひて自ら左し、東に指して自ら西に走るが如き輕浮の徒は固よりいふに足らず、時に委しく教へて懇に導く人の出づるあるも、我等が辨別の力に限あり、我等が推理の力の窮まる所あるを如何にせん。若し知り盡して後に行ひ、究め盡して後に事に

當らんとのみ求めんか、我等はいつも消え行く雲のあとを追ひて大海の上に漂ふの念あるを免れじ。これ我等の能く堪ふる所ならんや。玆に於て我等が心は要求していふ、『身を以て我に先んずる人無きか、身を以て我を率ゆる人無きか。我等か前に坐して理を談ずる人は多し、我等が前に立ちて動く人は無きか、有らば我直に立ちて之に從はん』と。斯る要求に應ずること能はずば、才の美と學の高きはありとも、何ぞ敢て人に師たらんといふを得んや。

くまも無き月の光にさそはれて
いく雲井まで行くこゝろぞも　（西　行）

と歌へる心のいかに悲しきぞ。

君がゆく越の白山知らねども
雪のまに〳〵あとは尋ねむ　（忠　岑）

と歌へる情は、今も我等に切ならずや。仰ぎ見る六百年前の日蓮聖人が、いつも身を以て人を率ゐ給へる高風の貴くも慕はしきよ。

我は斯く信じて斯く言ひ斯く行ふ、汝等たゞ我に從ひて信せよ、我が言ふが如くに言ひ、我が行ふが如くに行へ。汝等は我が徒なり、苦むも我汝等と共にせん、樂むも亦汝等と共にせん、我を憎む俗衆はまた汝等を憎まんも、我を愛したまふ諸佛はまた汝等を愛したまはん。汝等いざ來りて我に從へと、赤心を人の腹中に推

し、身を以て衆を率ゐ衆を導きたまふ、弟子たるもの鬼畜にあらざる限りは誰か感せざらん、木石にあらざる限りは誰か奮はざらん。

各々思ひ切り給へ、此身を法華經に更ふるは、石に金をかへ糞に米を更ふるなり。

（御振舞鈔）

の一言は、百千の危難を物の數ともし給はざりし、その勇猛無比の行と相俟ちて愈光輝あり。されば

佛滅後二千二百二十餘年が間、迦葉阿難等、馬鳴龍樹等、南岳天台等、妙樂傳敎等だにも未だひろめ給はぬ、法華經の肝心、諸佛の眼目たる妙法蓮華經の五字、末法の始に一閻浮提にひろ

まらせ給ふべき瑞相に、日蓮さきがけしたり。わたうども二陳三陳つゞきて、迦葉阿難にも勝れ、天台傳敎にもこへよかし。

（御振舞鈔）

と勵まさるゝに應じて、二陳三陳相つゞける勇猛の人多く、終に題目の聲に天下を震撼せしむるを得たるなれ。

彼の洪大なる信の力は、眼前に寂光土の善を盡し美を盡せる樣を描き出して、欣喜踊躍を禁じ得ざりしならん。欣喜踊躍して之を人に語り、以て人を導き率ゐたまへる、其の言々句々に如何ばかりか大なる力の籠りしよ。

退轉なく修行して、最後臨終の時を待て御覽せよ。妙覺の山に

走り登て、四方をきつと見るならば、あら面白や、法界寂光土にして瑠璃を以て地とし、金の繩を以て八の道を界へり。天より四種の花ふり、虛空に音樂聞えて、諸佛菩薩は常樂我淨の風にそよめき、娛樂快樂し給ふぞや。我等も其數に列りて遊戯し樂むべきことはや近づけり。信心弱くしてはかゝる目出たき所に行くべからず、行くべからず。（松野殿御返事）

之を詩といはんか、詩も音律を失はん、之を畫といはんか、畫も色彩を失はん、誰か之を讀んで踊躍し抃舞するを禁じ得べき。此の如くにして初めて人に師たらんのみ。

若し先たゝせ給はゞ梵天帝釋四大天王等閻魔大王にも申させ給

ふべし。日本第一の法華經の行者日蓮房の弟子也となのらせ給へ、よも芳心なき事は候はじ。（南條七郎殿御書）

此の如くにして大なる希望を與へられたればこそ、北條時宗を諫めて諸宗の虛妄を諭さんとし給へる時。

大蒙古國の簡牒到來に就て、十一通の書狀を以て方々へ申せしめ候。定めて日蓮が弟子檀那流罪死罪一定ならん、少しも之に驚くこと莫れ。方々への强言申すに及ばず、是れ併ながら强毒の故なり。日蓮庶幾せしむる所に候。各々用心あるべし、少しも妻子眷屬を憶ふこと莫れ、權威を恐るゝこと莫れ。今度生死の縛を切て佛果を遂げしめ給へ。（弟子檀那中御書）

と戒めらるゝに及びて、盡く死を視ること歸るが如くなるを得たるなれ。此の師ありて此の弟子あり、此の師弟によりて描き出されし壯嚴偉大の光景は、まさに日本歷史中の比類なき精彩にあらずや。

六

嗚呼今の世に師なし、我等は誰を仰ぎて我等の向ふ所を問はん。

敎ふる者の多くは己の爲にして道の爲にせず、自ら大にせんことを務めて人を進めんことを務めず、流弊の極まる所知るべきのみ。

何者の俗士ぞ

いかにせむ學びの道の駒くらべ

競ふもいやし後るゝもうし

とは歌へる。己が利と己が名とを忘れて、たゞ道を思ひ學を思はゞ、競ふも何か卑しからん、後るゝも何か憂ふるに足らん、我たゞ人と共に眞を究め善に進まば即ち可ならんのみ。仰ぎ見る六百年前の日蓮聖人が、己を忘れてたゞ天下の人の爲に盡したまへる、その心事のいかに美にして又醇なりしよ。

本より、學文し候し事は、佛敎をきはめて佛になり、恩ある人をも助けんと思ふ。佛になる道は、必ず身命をすつる程の事ありてこそ、佛にはなり候らめと推しはからる。既に經文のごとく惡口罵詈刀杖瓦礫數々見擯出と說かれて、かゝる目に値ひ候

こそ法華經をよむにて候らめと、いよ〳〵信心も起り後生もたのもしく候。死して候はゞ必ず各々をもたすけ奉るべし。

（佐渡御勘氣鈔）

苦を脱れんが爲に出家するものありや、名を成さんが爲に出家する者ありや。若しあらば是れ惑へるの甚しき者、我が聖人の罪人といふべきのみ。佛になるは己が爲ならず、惑へるものを諭し、苦める者を救はん爲なり。孔子もいはずや、『棖や欲、安んぞ能く剛ならん』と。名を求むるも欲なり、利を求むるも欲なり、欲に動されて動くものは、已に得る所なきを見れば、忽ちにして避け隱る。何ぞ至大至剛の氣象によりて終始を一貫するを得んや。また

何ぞ人を敎へ世を導きて至公至明の大道に依らしむるを得んや。

日蓮が諸難について御とぶらひ、今にはじめざる志ありがたく候。法華經の行者として斯る大難にあひ候は、くやしとも思ひ候はず。いかほど生をうけ死にあひ候とも、是ほどの果報の生死は候はじ。

（四條金吾殿御返事）

我が聖人にして此の言ある、まことに偶然にあらず、我が聖人に非んば、何ぞ此の言を出すを得んや。

鎌倉時代は武人の時代なり武人の興する所のものは榮え、武人の棄つる所のものは衰へぬ。生死の權は武人の手に在りき。斯る時代に生れて一身の名と利とを謀らんか、媚を武人に呈するの外ま

た何の道あちん。若し我が聖人の才學識見を以てして、身を禪僧の群に投じ縱横にその力を奮はんか、天下を風靡せんはまことに易々たりしならん。而して武人の歸依を一身に集めて得意滿々の中に一生を終らんこと極めて易々たりしならん。名利を收むべき道は獨り是のみならず。久しき戰亂に倦みて、たゞ偏に人生の無常を觀ぜる百姓の門に立ち、我が聖人の才學識見を以てして彌陀を說き念佛を勸むることを敢てせんか、活佛と仰がれ彌陀の再來と貴ばれんはまた極めて易々たりしならん。而も此の二つの事は聖人の爲すを屑しとし給はざりし所なり。

彼の俊成定家の小才を以てして、一代の歌人と仰がれ得意を極め

得たる當時に、若し我が聖人の横溢盡くる無き詩想を、この同じ方面に傾注せんか、才名の天下を壓するに至らんこと、更に易々たるものありしならん。されど此の如きは聖人の爲すを屑しとし給はざりし所なり。我が聖人は易きを避けて難きに就き、譽を集むべき道を去りて死を速くべき道に向ひたまへり。何の爲ぞや、たゞ天下の惑へる者を憫み、釋尊の心を以て其の心としたまひつればなり。

身輕法重死身弘法とのべて候へば、身は輕ければ人は打はり惡むとも法は重ければ必弘まるべし。（乙御前御消息）

と敎へ給ひ、

抑々一人の盲目をあけて候はん功德すら申すばかり無し。況や日本國の一切衆生の眼をあけて候はん功德をや、何に況や一閻浮提四天下の人の眼のしゐたるをあけて候はんをや。（全）

と說き給へる至公至大の見地に對して、我等は愧死するも尙ほ未だ足らざるを覺ゆ。何ぞたゞ貪夫をして廉に、懦夫をして起たしむるのみならんや。

七

嗚呼今の世に師なし、我等は誰に從ひて學を成し行を勵まん。花を養ふ者は花の美しからんを望み、人を敎ふる者は人の完からんを望む、是れ當に然るべきの理なり。但し梅を植ゑて櫻の花を

著けしめんと望み、萩を養ひて桔梗の花を開かせんと望まば、愚も亦甚しからずや。梅は梅ながらにして美しく、萩は萩ながらにして美し、梅に梅の性あり、萩に萩の性あり、其の性を全うし其の美を發揮せしむるを、能く花を養ふ人と稱すべし。人を敎ふることも亦何ぞ之に異らん、要は人をして邪を去りて正につき、以て各その性を全うせしむるに在るのみ。性に剛柔あり、氣に緩急あり。深く思ふに長じたるあり、廣く求むるに長じたるあり。動くに長じたるあり、靜なるに長じたるあり。甲乙彼此の相同じからんを求むるも、何ぞ其れ得べけんや。

其の長ずる所によりて之を導き、其の足らざる所に就て之を戒め、

各その器を大成せしめんは、人に師たる者の當に務むべき所にあらずや。若し甲乙彼此共に同じき鎔爐に投じ、同じき鑄型に容れんとのみ務めば、人を敎ふるにあらずして却て人を賊ふに終らんのみ。

相搆へ相搆へて心の師とはなるとも、心を師とすべからず。

（義淨房御書）

敎ふるものたゝ己が心を師とし、已に合するを取り己に合せざるを斥け、人々その性を全うせしむることを忘れてなほ『敎育』を口にし『敎化』を標枋するを得るか、惑ふも亦甚しからずや。

宋の蘇子瞻曾て詠じていはく、

横看成嶺側成峯。遠近高低各不同。不識廬山眞面目。只緣身在此山中。

人に師たるもの亦此の如くならざるべからず。遠きもの、近きもの、右よりする者、左よりする者、その見る所相同じからず、而も共に廬山の中に在るなり。遠くよりするものは遠きに應じて敎を與へ、近くよりするものは近きに應じて敎を與へ、右よりすれば右に應じ、左よりすれば左に應じ、宛も端倪すべからざるが如くにして、而も執り守る所は依然たり。要はたゝ其の性に應じ其の器を成さしむるに在り。仰ぎ見る六百年前の日蓮聖人が、人に應じ、時に應じ境に應じて之を導き之を諭し、人々をして各正道に

歸して、各その器を成しその德を積むを得せしめ給へる、大自在力のいかに偉靈なりしよ。

四十餘年の心血の凝りて今に殘れる『遺文錄』を開きて、其の千轉萬化の極まり無きを見よ。或時は幽玄微妙の理を語り、或時は日常茶飯の事を說き、或時は人の身の汚多く人の力の小なるを敎へ、或時は人々皆佛たるべしと諭し、或時は秋霜烈日の觀を示し、或時は春光和照の態を爲し、言を立つる或は微に或は明に、語を行る或は緩に或は急に、殆んど方物すべからず。

先づ此國の大王を敬て後に他國の王をば敬ふべし。天照太神正八幡等は我國の本主なり、云々　（善無畏三藏鈔）

とあると思へば、また

わづかの小島のぬしらが威さんをおぢては、閻魔王の責をばいかんかすべき。　（御振舞鈔）

とも敎へられ、

委細に經論を勘へ見るに、佛法の中に隨方毗尼と申す戒の法門は是に當れり。此戒の心はいたう事缺けざる事を、少〻佛敎にたがふとも、其國の風俗に違ふべからざるよし、佛一の戒を說給へり。　（月水御書）

とあるかと思へば、

今日本國を案ずるに、代始まりて已に久しくなりぬ。舊き守護

の善神は定めて福も盡き壽も減じ、威光勢力も衰へぬらん。佛法の味をなめてこそ、威光勢力も增長すべきに、佛法の味はたがひぬ、齡はたけぬ、爭でか國の災を拂ひ、氏子をも守護すべき。

（曉諫八幡鈔）

と說きて、佛法に合せぬは一事一物も皆排斥すべしとの意氣を示したまへり。守ること固きものは拘はりて變ずるを知らず、變通を知るものは守る所固からざるは、是れ世俗の通弊にあらずや。たゞ我が聖人の偉と大とありて初めて此の自在力を具すべきなり。

唐の張蘊古が

縱二心乎湛然之域一。遊二神於至道之精一。扣レ之者應二洪纖一而效レ響。

酌レ之者隨二淺深一而皆盈。

（大寶箴）

といへるもの獨り我が聖人に於て之を見るを得べきか、夫れ此の如くなるが故に門に趨りて敎を聽くもの、各その分に應じて器を成せり。

みどりなる一つ草とぞ春は見し
秋はいろ〳〵の花にぞありける（よみ人不知）

同じく來りて法を聽ける者にして、或は退きて修むるあり、或は出て說くあり、或は朝に或は野に、其の身と其の境とに應じて斯の法を弘め、終に題目の聲をして山に震ひ海を搖すに至らしめしもの、其の由て來る所まことに遠しといふべきなり。

八

嗚呼今の世に師なし、我等は誰にたよりて我等の身を安んずべき處を定めん。艸山の妙子梅を植るて句あり曰く、

與レ君同作二歳寒友一。松竹不レ花猶自香。

花を植ゆるものは花を樂む者ならざるべからず、花を友とするものならざるべからず。人に敎ゆるまた何ぞ之に異らん。樂んで導き樂んで敎へ、其の業の成り其の學の熟するを見ては、之を樂んで身の老ゆるを忘る。此の如くならずんば何ぞ人に師たりといふを得んや。博士デビスは一代の碩學なり、而も弟子ファラデーの名聲博士を壓するに至りて、博士頗る得意の色あり。門生の相集

りて博士が八十の壽を祝せるに際して、欣然としてファラデーを顧みていはく、

諸子よ、我が生涯の發見中、最大發見とも稱すべきは此のマイケル、ファラデーなりき。

と。博士は實に其の學術上に於ける幾十の發見よりも、一人のマイケル、ファラデーを弟子としたるを以て最大の誇りとしたりしなり。今の世の人に師たる者を見るに、往々にして此の如くならざるに似たり。仰ぎ見る六百年前の日蓮聖人が、人に敎ふるを樂み、人の美を濟すを樂みたまひし、其の度量のいかに海に似て寛く、いかに天の如く大なりしよ。

四條金吾に對しては、

かゝる日蓮にともなひて、法華經の行者として腹を切らんとのたまふ事、かの弘演が腹をさいて主の懿公が肝を入れたるよりも百千萬倍すぐれたる事なり。日蓮靈山にまいりて、まづ四條金吾こそ法華經の御故に日蓮と同じく腹切らんと申候なりと申上候べきぞ。

（四條金吾殿御消息）

と推奬し給ひ、筑後殿に對しては、

あはれ殿は法華經一部を色心二法共にあそばしたる御身なれば、父母六親一切衆生をもたすけ給ふべき御身なり。

（土籠御書）

と歎美したまひ、上野殿の妻が夫の去りて後なほ勤行の怠りなきを褒めては、

をとこの勸めによりて、法華經の行者とならせ給へば、佛と拜ませ給ふべし。生きて在しき時は生の佛、今は死の佛、生死ともに佛なり、即身成佛と申す大事の法門これなり。

（上野殿後家尼御前御消息）

と勵まし給ひ、妙一尼の信心怠らぬを喜びては、

法華經はいみじき御經にてをはすれば、もし今生に生ある身ともなり候なば、尼御前の生てをはしませ。もしは草のかげにても御覽あれ、をさなき公達等をばかへり見たてまつるべし。佐

渡の國と申しこれと申し、下人一人つけられて候はいつの世に
か忘れ候べき。此恩はかへりて仕へたてまつり候べし。

（妙一尼御前御消息）

と稱へたまひ、又治部殿の母が其愛孫を出家せしめしに對しては、
藤は松にかゝりて千尋をよぢ、鶴は羽を恃で萬里をかける。此
は自身の力にはあらず。治部房もまたかくの如し。我が身は藤
のごとくなれども、法華經の松にかゝりて妙覺の山にものぼり
なん。一乘の羽をたのみて寂光の空にもかけりぬべし。此の羽
をもて父母祖父祖母乃至七代の末までも弔ふべき僧なり。あは
れいみじき御寶はもたせ給ひてをはします女人かな。彼の龍女

は珠をささげて佛となり給ふ、此女人は孫を法華經の行者とな
して導かれさせ給ふべし。

（盂蘭盆御書）

と言を極めて稱揚し給へり。其の他諸弟子が一事の善、一行の美
に對しても、必ず深く之を喜びて且褒め且勵ましたまへること、
數ふるに堪ふべからず。されば諸弟子も善を積み行を修むるを樂
みて、

日蓮は日本第一の法華經の行者なり。日蓮が弟子檀那等の中に、
日蓮より後に來り給ひ候はゞ、梵天帝釋四大天王、閻魔法王の
御前にても、日本第一の法華經の行者日蓮房が弟子檀那なりと
名乘て通り給ぶべし。此法華經は三途の河にては船となり、死

出の山にては大白牛車となり、冥途にては燈となり、靈山へ參る橋なり。

（波木井殿御書）

といへる教訓を各その身に體し、共に法華の行者たるを喜びあへるなるべし。

うら〳〵とのどけき春のこゝろより
にほひ出でたる山さくらかな　（眞淵）

暖なる春の心と、大なる春の光と無くば、花もいかでか能く匂はん、鳥もいかでか能く歌はん。仰ぐべきかな、慕ふべきかな。

九

嗚呼今の世に師なし、我等は誰に從ひて身の過を正さん。世を導くものは世に從ひて己を枉ぐべからず、人を教ふるものは人に媚びんが爲に說を二にすべからず。此間若し一點の邪氣あらば、師たるの威嚴何によりて立たん。師既に威嚴なくば何によりて道を傳へん。『師嚴にして道尊し』の一句は語簡にして旨深しといふべし。若し聽くものゝ意に投せんが爲に、一毫たりとも己が信ずる所を枉げんか、是れ師として弟子に下るなり。在昔ソクラテスは此の如き徒を評して、『人に師たらんとして却て人の奴たる者』といへり。

むさし野を人はひろしとふ我はたゞ
尾花わけすぐる道とぞ思ひし　（宗武）

此の如くに自ら高く標置して、はじめて人を匡し人を教ふべきなり。仰ぎ見る六百年前の日蓮聖人が、世を警め人をさとし給へる態度の如何に嵩高にして又嚴正なりしよ。

聖人は能く人を撫育したまへり、されど正邪の分るゝ所に於ては一歩も假借し給はざりき。

慈覺大師は法華經と大日經との勝劣を祈請せしに、箭を以て日を射ると見しは此事なるべし。是は慈覺大師の心中に修羅の入て、法華經の大日輪を射るにあらずや。此法門は當世叡山其外日本國の人用ゆ可きや。若し此事實事ならば日蓮豈須彌山を投る者にあらずや。我弟子は用ゆ可きや如何。最後なれば申す也、

恨み給ふべからず。

（曾谷入道殿御書）

筆に風霜を挾むとは此等の文にあらずや。若し夫れ、

法華經を一字一句も唱へ、又人にも語り申さんものは教主釋尊の御使なり。然れば日蓮賤しき身なれども、教主釋尊の敕宣を頂戴して此國に來れり。此を一言そしらん人々は、罪を無間に開き、一字一句も供養せん人は、無數の佛を供養するにも過ぎたりと見えたり。

（四條金吾殿御返事）

といふに至りては、豈火を燧りて炊ぎ、土を穿ちて飲む人の文字ならんや。其の法華經を說くに當りて一言の非議をも容るゝを許さずと斷じたまへり。明快之に過ぐる無く、嚴正之に起ゆる無し。

學の博きと識の高きとは人の共に貴ぶ所、而も其の正道と合せざるものは斷じて之を斥け、更に假借したまはず、

當世の諸人は設ひ賢人上人などいはるゝ人々も、妄語せざる時はありとも、妄語せざる日はあるべからず。設ひ日はありとも、月はあるべからず。設ひ月はありとも、年はあるべからず。設ひ年はありとも一期生妄語せざる者はあるべからず。若し然らば當世の諸人一人もこの地獄をまぬかれ難きか。（顯謗法鈔）

身の貴きと位の高きとは人の共に仰ぐ所、而も正道を弘むるに當りては更に物の數ともし給はず、鎌倉を出で龍の口の刑場に赴かんとするに、八幡宮の前に馬を止めては、

日蓮今夜頸切られて、靈山淨土へまいりてあらん時は、まづ天照太神正八幡こそ起請を用ゐぬ神にて候けれと、さしきりて教主釋尊に申上候はんずるぞ。いたしと思さば急ぎ御計らひあるべし。

（御振舞鈔）

と憚る所なく告げたまへり。況んや將軍といひ、執權といふが如き一官職の徒をや。されば

清盛入道と頼朝とは、源平兩家本より狗犬と猿猴とのごとし。

（神國王書）

といひ、また

例せば頼朝右大將家は、泰衡を討たんが爲に泰衡を誑して義經

を討たせ云々（小乘大乘分別鈔）

と直言し、更に進みては

日本國に代始まりてより已に謀叛の者二十六人、第一は大山の王子、第二は大石の山丸、乃至第二十五人は賴朝、第二十六人は義時なり。

（筒御器鈔）

と喝破し、元冠に就きては

日本國はかしこき人々はあらめども、大將のはかり事つたなければかひ無し。

（乙御前御消息）

と斷言し給へり。此の如き意氣あるが故に、邪法を破し正法を顯はさんが爲には、何物を犧牲とずるも惜むべからず、生命をも惜

むな、家財をも惜むな、乃至妻子眷屬にも愛情の念を絶てよと嚴しく命じたまへるなり。

各々我弟子となのらん人々は、一人も臆しをもはるべからず。親を思ひ妻子を思ひ、所領をかへりみることなかれ。無量劫よりこのかた、親子のため所領に命をすてたる事は、大地微塵よりも多し。法華經のゆゑにはいまだ一度もすてず。（御振舞鈔）

法華經は親よりも、身よりも、妻子よりも重し、之が爲に捨てんには何者も惜かるべからず。

佛の御使と名乘りて臆せんは無下の人々なり。（仝）

此の如く嚴にして、門下一人の懈怠の者あらんを求むるも何ぞ得

べけんや。されど彼のエドモンド、バークが言へる如く『泰山には泉多く、偉人には涙多し』。聖人が他の一面に於て、いかに慈愛に富み給ひしかを見よ。

＋

嗚呼今の世に師なし、我等は誰の懷(ふところ)を尋ねてか此の身を投ぜん。叱るも笞つも、其の底に慈愛の潜めるありてこそ、人を懲し人を矯むるの力を具せるなれ。人の過なきに當りては青眼を以て之を迎へ、人の過あるにあへば忽ち白眼を以て之を見る、これ世の通態にあらずや。喜べる者には共に其の喜びを分たんと求むれども、悲める者をば更に顧ずして獨り泣かしむ、これ世の通態にあ

らずや。徒に高きを談じ遠きを語るも、涙なく愛なき人の言に、抑々何の力をか具せん。艸山の妙子いはく、

雖レ學二小乘一三藏。意爲二利人一。即是大乘之徒也。雖レ學二大乘一。唯爲二自利一。即是小乘之徒也。

また唯だ愛をいふにあらずや。されば又曰く、

我法也者以レ慈爲レ主。如二經云一。若有レ人問二誰是一切法之根本一。當レ言慈是。

固より一切の衆生の苦めるを己が苦みとし給へる我が日蓮聖人が大慈悲心の、機に觸れ事に應じて發露し顯現せるは當然の事のみ。

悟りて後人を化せんとす、これ大なる慈なり。されど聖人は之に滿足し給はず、自ら其の既往の經過を語りて、他の道を求むる便りとしたまへり。

此身に學文つかまつりし事、やうやく二十四五年にまかりなる也。法華經を殊に信じまいらせ候し事は、わづかに此六七年よりこのかた也。又信じ候しかども懈怠の身たる上、或は學文といひ、或は世間の事にさえられて、一日にわづかに一卷一品題目ばかり也。去年の五月十二日より今年正月十六日に至るまで、二百四十餘日の程は、晝夜十二時に法華經を修行し奉ると存じ候。其故は法華經の故にかゝる身となりて候へば、行住坐

臥に法華經を讀み行ずるにてこそ候へ。人間に生を受て是程の悅は何事か候べき。

（四恩鈔、時に年四十一）

何ぞ其の言の篤くして且懇なる。

難にあひて佐渡に遷されんとするに當りては、其身の苦難をかへりみずして、幽囚せられたる諸弟子を憫み、

各各は法華經一部づゝあそばして候へば、我身並に父母兄弟存亡等に回向しましまし候らん。今夜の寒ずるにつけて、いよ〳〵我身より心くるしさ申すばかりなし。（五人十籠御書）

とも、また

今夜の寒きにつけても牢のうちのありさま思ひやられていたは

しくこそ候へ。（土籠御書）

とも書きたまへり。誰か之を讀みて泣かざる者あらん。若くはまた彌源太入道の音信を得て、

是はさて置き候ぬ、御音信も候はねばいかにと思ひ候へるに、御使うれしく候、御所勞の御平癒の由うれしく候、うれしく候。

（彌源太入道殿御返事）

と喜び、四條金吾の身を案じて、

此より後には口をつゝみてたはすべし。又天も一定殿をば守らせ給らん。此よりも申すなり。かまへて〳〵御用心候べし。いよ〳〵にくむ人々ねらひ候らん、御さかもり夜は一向に止め給

へ。（主君耳入諸門免與同罪事）

と戒め給へる如き、骨肉と雖もいかで之に及ばん。身延山に在もて名越公時が妻より海苔を得て、

故郷の事はるかに思ひ忘れて候へるに、今此あまのりを見候てよしなき心をもひ出て憂くつらし。片海、市河、小湊の磯のほとりにて昔見しあまのりなり。色形あぢはひも變らず、など我父母かはらせ給ひけんと、かたちがへなる恨めしさ、なみだ抑へがたし。（新尼御前御返事）

と書きたまへる如きは、正に孝子が眞情の流露せるもの、優しくも又美はしからずや。

日蓮が色身は父母の遺体なり、日蓮が色身佛になりしかば、父母の身も又佛になりぬ。(盂蘭盆御書)

これをこそ眞の孝とはいふなれ。

その外四條金吾が妻の子を儲けしにつきて細に心を盡し、賴基が勘氣を蒙りしに際して懇に陳辨し、兵衛志が父の死を聞きて且は弔ひ且は勵まし給へる類、一々に擧げんは餘りに煩しからん。嗚呼上下二千五百餘歲、學高く德厚き人何ぞ限あらん、たゞ百獸も慴服すべき威嚴と、赤子も來り懷くべき慈容とを幷せ備へたるもの、我が聖人以外にまた何人かある。聖人を師とし仰げる彼の諸弟子こそ、永く後世に其の幸福を誇り得べき者なれ。

十一、

嗚呼今の世に師なし、されど我史を究めて六百年前に至り、こゝに一人の師を得たり。我は不幸にして六百年の後に生れ面のあたり其の音容に接するを得ざれど、我が聖人が心血の凝りて一卷となれる『遺文錄』は、泯びずして今に傳はれり。惟ふに幾百千年の後までも永く泯びずして傳はらん。襟を正し机を掃ひて、靜に之に對すれば、その妙音靈容の髣髴として我が耳目に在るを覺ゆ。

我は我が師をこの中に求むべきなり。

然れども我豈に能く之を知りて、之を語る者ならんや。慮淺く才拙うして身を名利の巷に置き、常に衣食の急に迫らる。茲に於て

得失是非の念紛々として我が心を惱まし、迷誤交々相鬪ひて底止する所無からんとす。我が塵俗の眼を以て、何ぞ我が聖人の高きと深きとを窺ひ知るを得たりといはんや。たゞ我は斯の如くにして自ら安ずるものに非ず、我は斯の如くにして尙ほ高きを求め深きを求めんとして休まざるが故に、我が聖人に對する渴仰の念日に長じ月に加はる。我日蓮宗大學に入りて先進諸子と伍すること既に五年、その間一日として聖人の遺德につきて聞かざること無し。斯くて我は法華經の一句をも解し得ざる凡夫なれど、我が聖人を讃仰する一念に於て、何人にも多く讓らざるを公言せんとす。

我は師なくして空しく彷徨す、世の青年の多くも亦師なくして空しく彷徨するに似たり。我は自ら憫み、また我と憂を同うする者を憫む。是の故に我が塵眼に映ぜる『師としての日蓮聖人』につきて語り、且は以て自ら慰め、且は以て我と憂を同うする者を慰めんとす。こゝに恭しく聖人降誕の祝典を修するに當り、我が愚痴の見を公にすべき機を與へられたるは、我同人諸君に感謝してやまざる所なり。

憶ひ起す七年のむかし、我父を片瀨の海邊に尋ね、一夜を龍口寺の下に明せしこと有りき。夜半夢破れてまた寢ぬること能はず、獨り多事多難なりし我身の過去をおもひて、心緒鬱結自ら之を解

くにたより無かりしが、曉近うして龍口寺の森を隔てゝ題目の聲の起るを聞き、我は覺えず枕を蹴て立てり。『奮へよ、堪へよ、汝が心の限りを盡し、汝が力の限りを致し、汝が責を果せ、汝が事を遂げよ。』と、彼の題目の聲と大地を搖する海潮の音との中に、神々しき言葉の響き渡れるを覺えき。夜あけて後獨り沙頭に立てば、題目の聲絶えてたゞ海潮の音を聞くのみ。されど我が心はこの時よりして奮へり。

去年十月身延山に詣で、棲神閣の裏に恭しく御像に謁せし時、端なくも、我が心に浮べるは彼の海潮の音なりき。今年この聖日に際して、我が聖人につきて語らんとする時、我が心に浮べるはま

た彼の海潮の音なり。艸山の詩人曾て詠じていはく、

時偕二觀自在一。共唱二海潮音一。

よし我が言は拙くとも、我が筆は鈍くとも、人々請ふ心を靜にして、海潮の音を此の裏に聽け。

明治四十二年二月十六日

253
1058

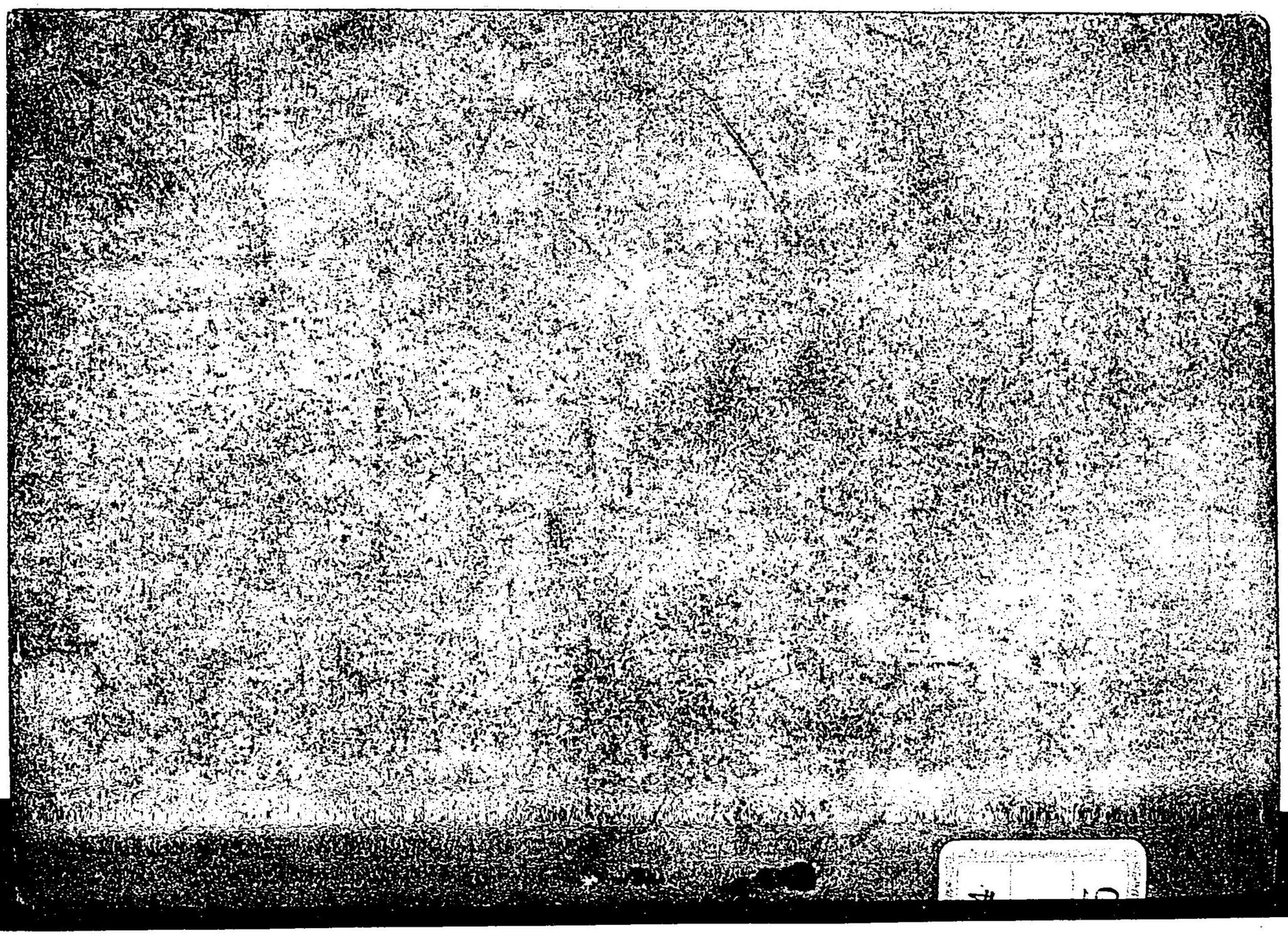
明治四十二年二月十三日印刷
明治四十二年二月十六日發行

海潮音奥附
定價金七錢

不許複製

著者　小林一郎

發行者　高田惠忍
東京府荏原郡大崎町谷山百六十番地

印刷所　中屋商店活版部
東京市京橋區木挽町二丁目十三番地

發行所　東京府荏原郡大崎町谷山百六十番地　谷山文學會